

第9回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム 「今、社会が科学者に求めることーソーシャル・ウィッシュ」参加報告

総合研究大学院大学

岩瀬 峰代

10月31日、筑波大学で本シンポジウムは開催されました。

跡見順子大会運営委員長は「東日本大震災以来、科学者は原点に戻って考え直す必要があり、男性の考え方だけでなく、女性の持っている感性を生かして対応しなければならないという思いからこのシンポジウムのテーマを「Social Wish」とし、基底テーマを「命と健康」としました。「命への感覚」をいかすことによって未来への方向性を指し示せるのではないかと期待しています」という趣旨を繰り返し述べられていました。

跡見先生をはじめ、運営委員の方々の「問題は数多くあるけれども、まず自分たちのできることから実行しましょう」という思いが伝わるシンポジウムでした。



分科会「震災で浮き彫りとなった科学のこれまでと今後」は宇宙生物学会に所属する「健康を科学する」ワーキンググループ（WG）の方々が中心に企画されました。

WGの方々は人間を含む生命システムや環境に注目し、男女共同参画社会に必要な科学を模索してきたそうです。しかし、この度の3.11大震災で「持続的環境維持のための科学」あるいは「生命に必要な科学」の必要性が浮き彫りになり、これまでの研究から貢献できるのではないかと考え、今回のセッションで議論することになったということでした。

最初の講演者は宇宙生物学会会長の大西先生でした。先生は微小重力や宇宙放射線などの宇宙環境に曝される生物現象を科学することによって、生命が地球上で生まれ、いかに巧みに重力に対する応答/適応や放射線抵抗性を獲得してきたかについて研究されています。

この度の原発事故で大気・土壌・水・海水・食料までも放射性物質によって広く汚染したことを踏まえ、「放射線の生体に対する影響や生物への影響を軽減させるためには」といった問題についてデータを提示しての説明でした。おだやかですが、力強い言葉から今回の震災復興に尽力しようという強い意志が伝わってきました。

次の講演者である山下先生は宇宙農業構想研究を基盤としている研究者です。山下先生はこれまでの研究から得られた技術や知識をもとに福島で除染活動を行っており、「ひまわり作戦」は有名です。ひまわり自体にはセシウム吸収能力はあまり高くはないということは、今回の一連の調査で明らかになりましたが、他の方法を探したり、他の研究者と協力して活動をしているとのことでした。

奥平先生は福島県立会津大学の企画運営室の教員です。緊急時対応に追われた様子や県立大学として被害の大きかった地域の方々の救援にあたられた話をお聞きすることができたのは、異なる観点で研究者の役割を考える機会になりました。

特に研究者として被災者の方々に向けた震災セミナーを行われた経験から「科学リテラシーの育成、伝えることの難しさを痛感した」という発表は印象的でした。奥平先生によれば、「客観的事実把握+判断力があってはじめて適応した行動ができる」ということが、緊急時には鮮明になるということでした。そして、そのような行動をとることはやはり難しく、研究者である私たちがやるべきことが多いということです。例えば、大学で教えている学生だけでなく、高校生や一般の人たちにもきめ細やかで長期的な対応（説明やレクチャー）を行い、信頼関係を育むこと、そして科学的な思考を醸成することは必須であるというお話は、実際に対応されている研究者としての重みがありました。

次に三重大学の生態工学研究者の加藤浩先生と一緒に活動している宇宙航空研究開発機構（JAXA）の長谷川克也先生の講演がありました。

「除染作業をしているとマスクがずれる。それを直そうとして土を触った手でマスクを触ると、そのマスクに付いた土を吸い込んで内部被曝してしまう。マスクが顔からずれても、手で触らず、そのままにしておいた方がよい」「稲藁や萱は放射能物質を良く吸収する。萱葺きの家は屋根が吸着するので、家の中の放射線量は低い」「福島に住んでいる人、特に若い人はもっと気をつけた方がよいけれど、それを喚起するシステムがない」など、実際に福島県で放射線量の測定に携わっている方だからこそ言える内容でした。

最後に話された跡見先生は生物学や生命科学・教育学や人間科学の視点から「いのちが生きる身体」を研究されています。少し時間が押してしまって話す時間はわずかでしたが、「あとがき」に次のような趣旨が記してあり、共感するものがありました。「気仙沼や南相馬市を訪れ、実際に測定して、現実を知ることではじめて、邪推や過度な恐怖を払拭し、この放射能汚染問題へ、具体的な解決策を提起できる感覚が生まれてきました。」そして「生活の場が失われた状況を被害地を見て、それまでの説明不可能な恐怖や後ろめたさを離れ、行動への第一歩を踏み出す勇気をもたらしてきました。」そして「1日も早い復興ための科学とは何かを考え、行動してゆくのが私たち科学者の義務であると思っています。」

午後に行われたパネル討論「社会が求める科学と科学者-女性科学者への期待」においても、東日本大震災によって顕在化した社会からの要請を科学者が意識する必要があることを明示した企画になっていました。

最初に、司会者である渡辺先生（東京農工大学）は「命に対して敏感な女性研究者が原子力に関係するポジションに何人かいれば原発事故を防げたかもしれない。また、持続的社会的のために女性研究者が果たす役割は大きいと考え、このセッションを企画しました。」と趣旨説明がありました。

最初のパネリスト菊池先生（首都大学東京大学院人間健康科学研究科教授）は機能的磁気共鳴画像法（fMRI）を用いて「母性愛」や「母性行動」の神経メカニズムに関する研究をされています。

ヒトの特性を理解しなければ、「意味のある科学」の方向性を見出すことはできないと菊池先生は考えており、「愛」「自意識」など、人間固有の高次の精神機能の脳科学的意味を明らかにする研究を進めています。その研究の一端を示していただきましたが、わが子を見るだけで、母親の眼窩前頭皮質（報酬系の中核）が活動し、母親にとってわが子がきわめて大きな報酬対象であることがわかってきたとのこと。つまり、眼窩前頭皮質は母性愛にとって大きな役割を

果たすこととなります。また、自己肯定性（自己と良いとの連合性）の研究において、潜在的な自尊心を測ることができたそうです。その時、男性脳は葛藤状態がほとんどみられないけれども、女性脳は複雑な反応、身体内部の葛藤状態みられるそうです。このことから女性脳には巧妙なメカニズムがあることが考えられるそうです。

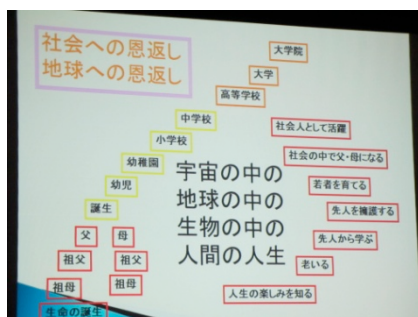
このようにデータを積み重ねることによって男女の違いを明らかにし、それぞれの特性を生かすことができれば、社会が求める科学への期待に答えることができるようになるかもしれないと思わせる研究でした。

樋口恵子先生（NPO法人高齢社会をよくする女性の会理事長）は79歳とは思えないほど、エネルギーにお話されていました。その中で、東日本大震災の被災地において保育所、小学校、中学校のような制度のしっかりしたところに通っている子供は亡くなることも少なく、かなりよい状況であったが、家庭の中だけで育てている子供（1～3歳児）の場合は母子ともに孤独な状況にあるということをおっしゃっていました。まだまだ女性に十分な手が差し伸べられていないという現状があるようです。現在問題になっている少子化というのは女性の静かなストライキなのではないかともお話しされていました。

また、介護問題も深刻な状況であることも指摘されていました。「70～60代は兄弟が多いので、その親を介護することは可能だった。しかし、今の50代以降の世代は1～2人くらいしか兄弟はいない。1組の夫婦が2～4人の介護をしなければならぬ。つまり“同時多発介護社会”になると考えられる。そうすると、おそらく男性も介護に関わらなければならないことになる。この状況は、非正規雇用問題の時と似ている。非正規雇用は女性だけの問題と思って放置していたら、女性だけでなく男性にも広がり、格差の大きい社会になった。介護問題も時間の問題である。男性教員の介護離職を招くことになる。」

樋口恵子先生のお話から、介護問題についても男女共同参画活動はどのように活動を進めいけばよいか、真剣に考えなければいけない時期に来ていると感じました。

最後のパネリストのなだいなだ先生には男女参画共同社会のあり方についてご自身の家族の系譜や精神科医としての経験を例に、話していただきました。なだいなだ先生にとって「男女平等」というのは「あたりまえ」のことだそうです。しかしながら、日本では常識の哲学が欠けて



いるとのこと。常識は偏見の塊であることを踏まえて、少しずつ変えていかなければいけないし、自分自身のことも見直す必要があります」とおっしゃられていました。なだ先生の82歳という年を感じさせない話し方やご自身の病気のことや精神疾患の呼称についても笑いに変えるユーモアのセンスは見習いたいとも思いました。

このようにパネリストの方々がとても興味深いお話をされたので、パネルディスカッションでは質問も多く、時間が足りませんでした。

さらに休憩後、「社会が求める連絡会-女性科学者が(だから)できること・連絡会の今後のあり方」というセッションがありました。塩満典子先生（JST科学技術システム改革事業推進室長）から、過去2回の大規模アンケートの結果について、我が国の男女共同参画政策と科学技術政策に果たしてきた役割と2012年の第3回大規模アンケート調査について説明があり、その後各分科会報告がありました。また、ロビーには各大学、各学会の男女共同参画事業の活動報告が展示さ

れており、どの団体も様々な工夫を重ね活動が行っていることがわかりました。

本当に充実したシンポジウムでした。そして、ここで学んだ事を次にどのように繋げていくかが私の課題となりました。